授業を組む

１．問題解決的学習展開

子どもの学びたい事柄と先生が教えたい事柄が一致しなければ、授業は成立しない。導入とは、その２つの事柄を一致させる作業であるため大切であるといわれる。すなわち「動機付け」である。子どもたちが、「やってみたい」「知りたい」と思わなければ授業は始まらない。そして、「１年間の」「単元の」「毎時間の」見通しを子どもたちに持たせることが、「問題解決的学習展開の授業を組む」ポイントである。

１．１年間の見通しを持たせるために

―この学年でどんなことを勉強してどんな子どもに育ってほしいか。―

・４月のはじめにそれぞれの教科でどんな勉強をしていくかを先生が話をする。
・そのためには、事前にその教科を通してどんな子どもに育てたいか、どんなことを獲得させたいか、何を教えなければならないかをはっきりさせ、年間指導計画を立てておく必要がある。

２．単元の見通しを持たせるために

―単元のねらいをはっきりさせる。学習の目的をはっきりさせる。―

何のためにこの単元を学習するのか子どもたちがはっきりつかむことが大切である。

〇単元のはじめに「学習内容」を決める。
・提示型：先生が一方的に指導計画に沿って、「学習内容」を提示する。
・設定型：先生と子どもたちで、「学習内容」を決めていく。
・発掘型：子供たちが、自分たちの今までの経験をもとに「学習内容」を決めていく。
※せめて、設定型で単元の見通しを子供たちに持たせてやりたいが、提示型でも仕方がない。
学習内容をつかませないで、授業に入るのが、一番よくない。
※どうしても「提示型」が多くなる。だから、「設定型」にできる単元は、「設定型」にしたい。
※学習内容：子どもサイドの表現。指導内容：教師サイドの表現

〇「設定型」の進め方
①単元全体を子どもたちに読ませる。
・今までの経験や学習内容から考えられる場合は、読ませる必要はない。
②そこで、学習したい内容を発表させる。→たぶん、具体的な内容になる。
③まとめられるところは、まとめて、「学習内容」とする。
④「指導内容」と比較して不足のある場合や先生がやりたい内容は、先生のほうから提示する。
⑤決めた「学習内容」に従って授業を進めていく。
※「学習内容」を決めるとき、順番をよく考えておくこと。

〇「この単元を学習して、こんなことをしたい。」
「この単元を学習して、こんなことについて知りたい。こんなことについて考えたい。」
「この単元を学習して、こんなことについてまとめたい。」
「こんなことをするために、この単元を学習したい。」　　など

〇そのためには、単元構想（単元計画）が、必要である。
・せめて、毎時間の学習のめあてとその時間のまとめは、かいておきたい。
・毎時間の学習の流れや板書計画があれば、なおさらよい。
・毎時間が、その単元のどこに位置するかはっきりとわかる必要がある。

３．毎時間の授業

何を教え、何を考えさせるかはっきりと教師が把握する必要がある。

①問題把握

〇授業の始めに子どもたちにその時間の学習の目的と学習内容を把握させ、見通しを持たせる。

「今日はこの問題を解いて、こんなことについて考えよう」
「今日はこのことについて調べ、こんなことについて考えてみよう。」
「今日は、ここについて考え、そこからこんなことについて考えよう。」　など

〇予想（仮説）をたてさせ、解決の見通しを持たせる。

記録に残す必要のある場合とない場合がある。特に理科・社会科は、ちゃんと予想を立てさせる必要がある。

②自力解決

〇自分でその問題の解決に当たる。（１０分～２０分）

〇個別指導：特に学力の低い子どもたちへの指導に重点をおく。
複数指導においては、特に担任が、学力の低い子どもの指導に当たる。

③学びあい

〇話し合い活動。コミュニケーション能力の育成。

〇お互いに自分の考えを発表し、練り上げ、まとめていく。

④まとめ

〇過程と結果（原理と結果）をまとめる。

「こんなことを調べていったら、こんなことがわかりました。」
「こんな考えで問題を考えていくと、こんな結果になりました。」
「こんなことをしてこんな結果がでたので、こんなことがわかります。」

〇できれば、子どもの力でまとめさせたい。
〇もれがおこる可能性がある場合は、先生と子どもたちでまとめる。

⑤ふりかえり

〇この１時間を振り返る。結果ではなく過程を大切にする。
〇定着を図る。
〇内容を拡張・発展・一般化等

４．問題解決的学習展開で授業を行うためにノート指導が必要である。

〇今日の課題（問題）を書くところがある。
（〇予想を書くところがある。）→書く必要がない場合もある。
〇自分の考えを書くところがある。
〇話し合った内容を書くところがある。
〇授業のまとめを書くところがある。

１時間の授業のチェックポイント

１．本時のめあてが、わかっているか？
　　見通し（何を考えるか・何がわかればいいか）・子ども仕様のめあて
２．考える内容と時間が確保されているか？
　　教える内容と考えさせる内容をまちがえないこと。
３．意見交換する内容と時間があるか？
４．過程と結果でまとめられるか？
　　過程が大事。過程→結果→考察・発展・活用

2．教材研究

☆教材を二層構造的にとらえ、授業を二層構造的に構築する。

①教材を二層構造的にとらえる。

・教材を「思考・判断・表現」（深層）に支えられた「知識・技能」（表層）として捉える。

表層	教える内容・量的なもの・結果・基礎	知識・技能
深層	育てる内容・質的なもの・原理・基本	思考・判断・表現

・知識や技能を忘れたとき、それを思い出す思い出し方を知っている子どもを育てるのがねらいである。たとえば、算数科において、九九を忘れたとき、累加の方法や分配法則、交換法則、結合法則等を使って思い出すことのできる子どもを育てるということである。

②授業を二層構造的に構築する。

①授業の目標を「表層」「深層」にわける。

②「教える内容」と「育てる内容（考えさせる内容）」を明確にする。

③授業のまとめは、「表層」と「深層」をはっきりと区別する。

「今日は、〇〇という問題を△△という考え方で解くと、□□という結果になりました。」

④１時間の授業の中で「表層」と「深層」を同時達成させていく授業を構築する。すなわち、「思考・判断・表現」に支えられた「知識・技能」として指導していく。知識や技能を理屈付きで子どもたちに獲得させていくということである。

☆「記憶する教育」から「忘れる教育」へ

「記憶する教育」は、子どもの不安を増大させ、精神的動揺を与える。

「忘れる教育」とは、忘れても思い出す思い出し方を知っている子どもを育てる教育。

１．教科書の教材の内容を知る。

・教材をしっかり読み取る。国語なら、特に文末表現に気をつける。また、助詞や助動詞など、当たり前だと思っていることを見直すことは、どの教科も大切である。算数・理科なら、教科書をよく読めば、既習事項もわかるようになっている。社会科については、読み流すのではなく、読み込む。

・指導者が「わかっていること、知っていること」と指導者が「教えること」とは、つながらない。

・子どもが何をどのように知っているかを予想する。

・まず、指導者が、教材に「感動する」ことが大切である。

２．小学校学習指導要領解説の関係のあるところを読む。

・教材の意図をつかむことができる。

・大まかな指導内容がわかる。

３．業者の指導書を見る。→あくまでも参考！

・業者の指導書でその通りに授業をすると時間数が足りなくなる。

・業者の指導書は、全国の平均的な児童、平均的な先生像を想定して書いているため、自分のクラスにはあてはまらないことも多い。そこを見極められないでそのまま授業すると、子どもも指導者も意欲を失う授業になる。

・教材について新しい発見はないか？

・疑問に思っていたところの説明はないか？

・指導目標を参考にして、単元目標を設定する。

まず、単元全体の計画を立てる。

４．単元の目標を設定する。

・大きく「教える内容」と「考えさせる（育てる）内容」にわけて設定する。

・この教材で自分としてねらいたい事（子どもに獲得させたいこと）を加味する。

・毎時間の単元指導計画（課題とまとめ）をかく。（子どもに伝える表現でかく。）（※３）

・導入をどうするか考える。単元の初めには、子どもに単元の見通しをもたせるような導入をする。

・必要な資料・ワークシート等を準備する。

５．毎時間の計画（※２）を立てて、授業を進めていく。

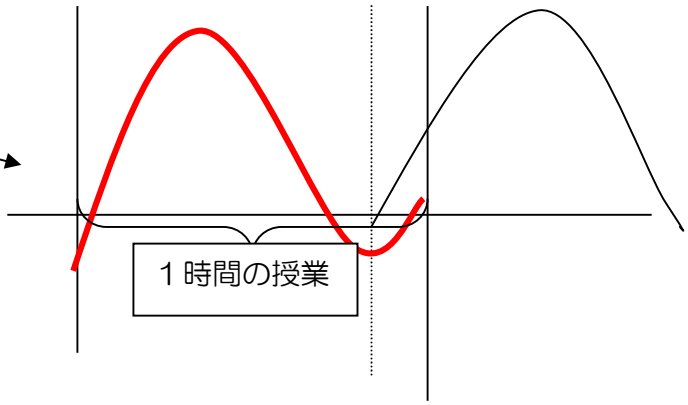
・本時の課題：大きく「教える内容」と「考えさせる（育てる）内容」にわける。
　　特に、この時間何を考えさせるのかはっきりさせておく。
　　時間の始めに何について何を学習するのか、はっきりと子どもにつかませる（伝える）。
　　「今日は、〇〇を学習して、〇〇について考えよう。」
　　「今日は、〇〇を調べて、〇〇について感想をかこう。」
　　「今日は、〇〇について考え、〇〇を見つけよう。」など
　　１時間の授業の流れ（手順）を説明することも必要なときがある。

・毎時間の簡単な授業計画と板書計画（※１）を立てる。

・授業が終わってから、次の時間の計画の修正をする。

６．授業の流れ

次時への見通しを子どもに
持たせることが大切である。
動機が継続する。



※１（板書計画）（※１）

・日付・単元名・小単元名
・めあてをどこにかくか。
・手順をどこにかくか。
・子どもの発言をどこにかくか。
　どうまとめていくのか。
・まとめをどこにかくか。

※板書計画と同時に「ノート指導」も必要である。板書の内容のどれをノートのどこにかくかという指導が必要。
※いつも同じ「ノートのかき方・板書」をつくると、子どもは、わかり易いし、指導者も見やすく、評価もしやすい。
※子どもの頭の中にどんなイメージを残すかを考えた板書。

※授業計画を書く前に、単元のだいたいをとらえる必要がある。

（国語）
〇話すこと・聞くこと・書くことの単元では、
１．獲得させる技能を明確にする。
２．そのための題材が何であるか確認する。
３．手順を明確にする。

これを使って、こういう手順で、これを獲得させる。を明確にする。

４．技能・題材・手順を検討。
　①削る。変更する。加える。
　②題材をより身近な問題にする。

〇読むことの単元では、

読み方・読み取り方を獲得させるのが最終的な目的である。
だから、並行読書を取り入れたり、キャッチコピーをしたりするのである。
教材の内容をとらえながら、読み方、読み取り方獲得させていくのである。

1．物語
※子ども主導型の授業を組み立てる。
※主題を考える。主題にいかにせまるかが、授業。
①この単元を学習して、何をするかを決める。
・紹介文をかこう。　・キャッチコピーをつくろう。
②あらすじをとらえる。
③感動したところを見つけ、文にまとめる。
④表現の素晴らしいところを見つけ、文にまとめる。
⑤主題について考え、自分の考えを持ち、文にまとめる。

2．説明文
※主張を考える。
①この単元を学習して、何をするかを決める。
②あらすじをとらえる。
③意味段落→小見出し→形式段落の要点（短い文で）→要旨
④主張に対して、自分の考えを持ち、文にまとめる。

→このような学習を通して、読み方、読み取り方を獲得させる。

（算数）
1．単元の指導内容を調べる。
教える内容と考えさせる内容→単元目標
2．毎時間の指導内容を調べる。
教える内容と考えさせる内容→毎時間の目標
「この問題をどんな考え方を獲得させようとしているのか。」
3．毎時間どうまとめるかを考える。
教える内容と考えさせる内容でまとめる。

（社会）
1．教科書の内容を箇条書きにする。
〇指導内容・知識・技能・用語をもれなく抽出
2．どこで何を考えさせるか決める。
調べる→調べた内容を使って考える。
3．単元の課題・毎時間の課題を決める。
4．単元の課題・毎時間の課題を子ども仕様に変える。
「〇〇について調べ、□□について考えよう。」
5．単元全体の流れを考える。
〇小単元で組み替えることもある。。
〇まとまりを変えることもある。。

（理科）
1．教科書の内容を箇条書きにする。
〇実験か観察か調べ学習かをはっきりさせる。
〇指導内容・知識・技能・用語をもれなく抽出
2．何を考えさせるか決める。
〇「わかったこと」にまとめさせる。
〇教科書のまとめ以外に見つけさせることが大切。
3．単元の課題・毎時間の課題を決める。
〇実験の場合は、仮説を立てさせることが大切。
そして、実験結果を予想することが大切。
4．単元の課題・毎時間の課題を子ども仕様に変える。

５．単元全体の流れを考える。
〇小単元で組み替えることもある。
〇まとまりを変えることもある。

７．簡単な単元指導計画（※３）
できるだけ子どもサイドの文章表現にする。

(　　)科　　単元別授業計画

１．学年・単元名：

２．単元の目標

３．単元の観点別目標
①知識・技能

②思考・判断・表現

③主体的に学習に取り組む態度

４．この単元で子どもたちに何を身につけさせたいか。
・
・

５．単元学習計画（できるだけ子どもサイドの表現で、子供にわかりやすく）

単元学習計画（子どもに事前に知らせる。）	
子どもに事前に知らせる。 何を(どこを)どうするのか。(作業・教える・考えさせる)	どうまとめるのか。 何についてまとめるのか。
１．	
２．	
３．	
４．	
５．	
６．	
７．	

８．簡単な１時間の授業計画（※２）

（　　）月（　　）日（　　）　教科（　　）指導者（　　）

１．単元名：

２．本時の目標（第　　時）
・何を（どこを）どうするのか？（授業のはじめに子どもたちに知らせる。）

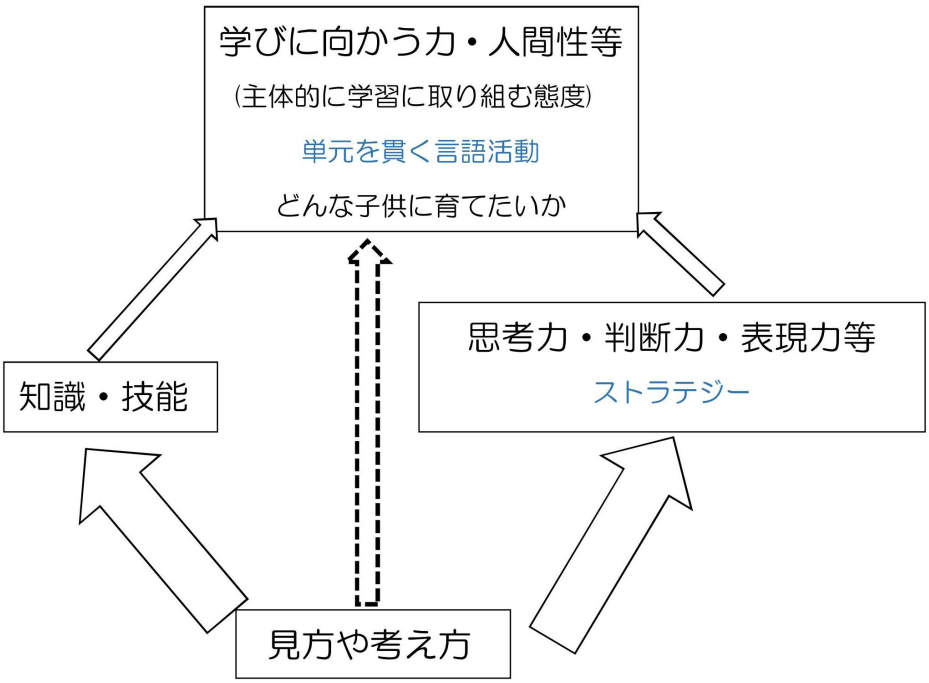
３．本時の観点別目標

①知識・技能	A B
②思考・判断・表現	A B
③主体的に学習に取り組む態度	A B

４．本時の学習展開

	評　価
１．はじめ(問題把握) ・めあて ・主発問をかく。	①
２．中（自力解決・学びあい） ・自分で課題の解決に当たる。（個別指導） ・学びあい・練り上げ：話し合い・意見交換（簡単に予想してかく。）	②
３．おわり（まとめ・ふりかえり） ・どのようにまとめるか？どのような評価をするか？次時へどうつなげるか。 ・定着・拡張・一般化　等	

※どこで何をどう評価するかを明確にすること。



３．授業の実際

学校教育の目的は、「子どもの人格形成」である。 授業を通して、子どもの人格を形成していくのが目的である。

＝ヒドゥンカリキュラム

１．子どもが、「わかった」「そうだったのか」「なるほど」「知らんかった」とつぶやく授業。
　・「わかる」３ステップ　①手続きがわかる　②意味がわかる　③活用ができる
２．授業とは、「質の高い映像的イメージを子どもの頭の中にどうつくっていくか」ということ。
　・イメージ化を助けるもの：表現・動作化・絵・図
３．授業は、「子どもは、知っている。」を前提に組み立てる。メタ認知
　ただし、子どもは、「何を知っているか」「どのようにしっているか」をしっかりと指導者は、把握する必要がある。
　　無意識な事柄を意識化させる。
　　「なんとなく」を明確にする。
　　いろいろなことを分類整理する。
　　→「そうだったのか」「なるほど」
　　（「知らない」を前提にしない。）
４．授業は、単元の導入を大切にし、目の前の子どもの実態にあったように工夫する。
　導入の内容によって、単元全体の指導内容や流れが大きく変わる。

〇１時間の授業は、
　１．めあてがはっきりしている。（子どもサイドの表現）
　２．考える場面がある。
　３．話し合う場面がある。
　４．学力の低い子どもが、納得する場面がある。→「わかった」
　　（学力の低い子供に合わせる場面がある。）
　５．学力の高い子供が、感心する場面がある。→「わかった」
　　（学力の高い子供に合わせる場面がある。）
　６．まとめ・振り返る場面がある。
　※一斉に全員が、何かをする場面がある。

〇１時間の授業は、
　・低学年は、15分区切りで
　・中・高学年は、ノート指導を→「何をかくか」より「どこにかくか」場所を指定

〇毎時間、必ず評価を出す。評価の「見える化」
　・ノート、ワークシート等を授業後回収し、３段階程度の評価をかく。
　　コメントを付け加えるのもよい。

まとめ

１．導入をしっかり考える。（動機付け）
２．授業は、問題解決的学習展開
・「子どもは知っている」を前提に授業を組み立てる。
・「質の高い映像的イメージを子どもの頭の中にどうつくっていくか」を考え授業を組む。

３．教材研究
・教材に感動する。
・教材内容に疑問を持つ。「あたりまえ」に疑問を持つ。
・指導書は、時間数と指導内容だけを参考にする。

４．教材研究・授業の組み立てにおけるキーワード
・感動
・問題解決・メタ認知
・知っている
・単元計画
・教材に精通
・イメージ化：映像的イメージ
・一斉指導の中の個別化
・見通し、手順
・自己評価
・ノート指導、評価の見える化